

# 大村はまの単元学習指導「古典入門」（昭和25） と学習指導要領（試案）

坂 東 智 子

（兵庫教育大学大学院・院生）

## はじめに

本稿では、戦後初期の代表的な単元学習指導として「古典入門—古典に親しむ」（昭和25）を取り上げ、昭和22年『学習指導要領試案国語科編』（以下本稿では22年試案とする）に成文化された新教育の理念、単元学習の理論と方法との関係を考察する。

## 1. 昭和22年『学習指導要領試案国語科編』と大村はま単元学習

### （1）国語科編が示す国語教育の新しい方向

22年試案国語科編により戦後の新しい国語教育の方向が示された。その第一章第二節「国語科学習指導の目標」の冒頭には、「国語科学習指導の目標は、児童・生徒に対して、聞くこと、話すこと、読むこと、つづることによって、あらゆる環境におけることばのつかいかたに熟達させるような経験を与えることである。」<sup>（注2）</sup>とある。

終戦を契機に教育改革が進められ、国語教育も、戦中の「皇国主義、国家主義、全体主義の時代思潮を基調とする錬成教育」は一転して、「民主主義思潮を基調に、ことばを広い社会的手段として用いるような、要求と能力を養う」<sup>（注3）</sup>方向に変わった。

興水實は、古典や文学を重視した従来の国語教育に比して22年試案が「日常生活における言語技術」に眼を向け、子どもの個性や言語発達の実状を考慮した「個に応じた指導」の必要性を説いていることを評価し<sup>（注4）</sup>、言語教育としての国語教育が目指されていることを肯定的に受け止めている。

飛田多喜男は、22年試案の記述内容を中立的、客観的に読み取り、「言語教育としての国語教育の立場」「ことばの機能を重視する言語観」「生活的必要性和学習者の興味・関心」や「活動（経験）を重視する」言語学習法が具体的に示されている<sup>（注5）</sup>との見解に立っている。

井上敏夫は、「経験を与えるだけ」で「知識や技能が定着する」かどうかについては、「不安を感じる」人々が存在したと述べ、経験主義的教育に対して懐疑的な見方もあったことを記している<sup>（注6）</sup>。

戦中の国語教育が、「国民的思考感動」を体得させることを主眼としたのに対して、22年試案に示された新しい国語教育は、「ことばの実用性」をもっとも重視したものであるといえよう。

大村はまは、このような新教育の理念、教育方法をどのように受け止めたのだろうか。

### （2）大村はまの自筆ノートに記録された22年試案の性質と教育方法

昭和22年4月の新制中学校発足と同時に、大村はまは、高等女学校から中学校へ転じた。翌年の昭和23年6月には、教員再教育指導者養成協議会が開催され、大村はまは、東京都の代表の一人として協議会に参加している。その時の自筆ノート3冊（A5版）（以下本発表では自筆ノートとする）が鳴門教育大学附属図書館に所蔵されている。青色のインクで書かれた講義ノートの1冊目には、森田中等教育課長の「新制中学校教育の原理」と、オズボン氏の「新制中学校教育課程の編成について」が記録されている。オズボン氏の講義の中の、「三、教科課程の性質」には、次のような一節がある。

デューイによると、教科課程を「教科課程は解決さるべき問題である」といつている。即ち、その場合、生徒が生徒の社会、学校、家庭の現実生活において、いろいろの問題が出てくる。それを解決していく課程を考えると、1. 困難にぶつかる、問題の発見。2. (1)を観察して問題の性質をよく認知する。3. 解決の曙光が見出される。なんらかの様で。4. 実際解決のための活動を行う。5. そのいろいろの活動を一つの結論に構成する。結論に達する。

以上によって、生徒の問題とその解決のあとを教科課程と見ている。このような生徒の生活体験の中心になるような問題を学校教育と考えねばならぬ。(大村はま自筆ノートより引用)

引用部は、22年試案の性質を如実に示しており、その教育方法である単元学習の基底に据わる理論である。22年試案国語科編の参考一「単元を中心とする言語活動の組織」には次のようにある。

単元による方法は、児童・生徒が解決しなければならないような問題をだし、児童生徒が問題を解くときのすべての経験、到達した結論、達成した結果をまとめていくことであると定義できるであろう。(注7)

単元による方法の、学習者が問題を解くときのすべての経験、結論、結果をまとめていくという部分は、大村はまの戦前からの「国語筆記帖」指導に重なるところが大きい。大村はまは、戦後新しく導入された単元による方法や、学習者の主体性、自発的活動を重んじるという理念が、自身が受けた大正自由主義教育や、戦前の高等女学校での自らの指導と親和性を持つものであることを実感したと考えられる。

## 2. 22年試案国語科編における古典の取扱い

22年試案国語科編「第四章 中学校国語科学習指導」における、古典に関する記述は極めて少ない。主な先行研究としては、以下の4編がある。1. 鈴木二千六『古典教育の史的展開—教育制度から見た古典教育—』(1994平成6年12月 近代文藝社刊)、2. 矢部玲子「学習指導要領に見る戦後中学校国語教育における『古文』の取扱い」(浜本純逸編『国語教育史研究』第2号2004平成14年3月 国語教育史学会刊)、3. 渡辺春美「戦後中学校学習指導要領の展開—古典の取扱いを中心に—」(渡辺春美『戦後における中学校古典学習指導の考究』2007平成19年3月 溪水社刊)、4. 小和田仁「I 古典教育のながれ」(国語教育基本論文集成第17巻『国語科と古典教育論 古典教育論と指導研究』1993平成5年 明治図書刊)。以上4氏の見解を次にまとめた。

鈴木氏	新たな古典教育が模索された。古典教育は、旧来の「程度の高さ」からの解放と社会生活に役立つ国語の力の育成との2つの理由で否定的な出発となった。また、 <u>戦前戦中の古典教育への否定的意識の大きさ</u> も注目される。
矢部氏	日常生活のことばから離れないようにするという指導方針と、 <u>戦前の「國民…ノ涵養」からの決別という狙いから、古典教育の地位は大幅に後退した</u> 。この方針は、現代語訳に偏るという問題として現在まで影響している。
渡辺氏	ことばの生活に結ぶ古典教育への始発 <u>訓詁注釈的な古典教育、国民精神の涵養のための古典教育とは異なる、豊かなことばの生活にむすぶ新しい古典教育を求め模索する姿をとらえることができる。</u>
小和田氏	古典の教育を文学の教育として捉える考え方を基底にしている。 <u>従来の指導方法を批判し、文学教育や古典教育が特殊な趣味養成に陥ることを拒絶して、実生活に役立つことが求められている。</u> しかし、「古典の教育からの解放」なることばが、古典の教育をどうしなければならないというのか、その具体的方略を明示しているとはいいいがたい。

渡辺氏を除く3氏は、「戦前戦中の古典教育の否定」、「古典教育の地位は大幅に後退した」、「従来の古典指導方法の批判」と受け止め、渡辺氏のみが、「ことばの生活に結ぶ古典教育への始発」と捉えている。

大村はまは、「国文学研究に志す専門家の古典の学習のしかたそのままの方法がとられてよいわけではない。はっきりと別の方向へむけたい、従来の方法とは別の、中学生のための方向を探したい」（注24）と述べ、従来の程度の高い教養主義的な古典教育とは異なる新しい古典学習の方法を求めた。その具体的な実践が昭和25年の単元「古典入門」（注25）であったと考えられる。

### 3. 戦後初期の単元学習の典型としての「古典入門」（昭和25）

野地潤家は、大村はまの単元学習指導「古典入門」を、「戦後、中学校単元学習の創始者であり、推進者であられた大村先生の、この『古典入門』のご指導は、新制中学校におけるもっとも典型的な実践事例となった。」（注26）と評価する。「古典入門」は、戦後中学校における大村の古典学習指導の原点であり、戦後初期の単元学習の特徴を具備した実践事例の典型である。本節では、「古典入門」での学習の実際を概観し、その前単元「物語の鑑賞」との繋がりに言及した上で、飛田多喜雄氏の挙げた戦後初期の国語科単元学習指導の特徴9項目と、平井昌夫氏の新しい学習指導法としての単元学習法の特徴8項目に同単元の実践を照応させて考察を行う。

#### （1）単元学習指導「古典入門」の実際（構造）

学 習 活 動 （数字）は、単元に入って何時間目の授業かを示す（単元は全27時間）										
導 入	<table border="1"> <tr> <td>全</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・古典についての文章の掲示(0)</li> <li>・学習の目標(1)</li> <li>・指導者によるテキストの朗読(1)</li> <li>・古典を解説したプリントの朗読(2)</li> </ul> </td> </tr> <tr> <td>3h</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習の進め方の説明（グループ学習と個人学習）(3)</li> </ul> </td> </tr> </table>	全	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古典についての文章の掲示(0)</li> <li>・学習の目標(1)</li> <li>・指導者によるテキストの朗読(1)</li> <li>・古典を解説したプリントの朗読(2)</li> </ul>	3h	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習の進め方の説明（グループ学習と個人学習）(3)</li> </ul>					
全	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古典についての文章の掲示(0)</li> <li>・学習の目標(1)</li> <li>・指導者によるテキストの朗読(1)</li> <li>・古典を解説したプリントの朗読(2)</li> </ul>									
3h	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習の進め方の説明（グループ学習と個人学習）(3)</li> </ul>									
展 開 I	<p>グループの学習，個人の学習を並行してすすめる</p> <table border="1"> <tr> <td>グ ル ー プ</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・希望によるグループ分け，予定作成(4)</li> <li>古事記放送劇班，平家物語放送劇班</li> <li>宇治拾遺幻灯班，枕草子幻灯班</li> <li>枕草子作品研究班の5グループ</li> <li>・シナリオを書く，絵を描く(5～11)</li> <li>・発表会にむけての練習(12～18)</li> </ul> </td> <td>個 人</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・古代和歌の調べ方</li> <li>・万葉集，唐詩選の口語詩</li> <li>・徒然草，論語の討論会の準備</li> </ul> </td> </tr> <tr> <td>17h</td> <td colspan="2">国語研究発表会(19～20)</td> </tr> </table>	グ ル ー プ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・希望によるグループ分け，予定作成(4)</li> <li>古事記放送劇班，平家物語放送劇班</li> <li>宇治拾遺幻灯班，枕草子幻灯班</li> <li>枕草子作品研究班の5グループ</li> <li>・シナリオを書く，絵を描く(5～11)</li> <li>・発表会にむけての練習(12～18)</li> </ul>	個 人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古代和歌の調べ方</li> <li>・万葉集，唐詩選の口語詩</li> <li>・徒然草，論語の討論会の準備</li> </ul>	17h	国語研究発表会(19～20)			
グ ル ー プ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・希望によるグループ分け，予定作成(4)</li> <li>古事記放送劇班，平家物語放送劇班</li> <li>宇治拾遺幻灯班，枕草子幻灯班</li> <li>枕草子作品研究班の5グループ</li> <li>・シナリオを書く，絵を描く(5～11)</li> <li>・発表会にむけての練習(12～18)</li> </ul>	個 人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古代和歌の調べ方</li> <li>・万葉集，唐詩選の口語詩</li> <li>・徒然草，論語の討論会の準備</li> </ul>							
17h	国語研究発表会(19～20)									
展 開 II	<table border="1"> <tr> <td>全</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・論語についての解説(21)（全体）→感想文作成（個人）(21)</li> <li>・研究授業の準備(22)</li> <li>・論語を読んだ感想の批評(23)</li> </ul> </td> </tr> <tr> <td>グ</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・テスト(24)</li> <li>・新聞企画の話し合い（グループ討論の後全体発表）(25) ※企画のみ</li> </ul> </td> </tr> <tr> <td>個</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・論語についての討論会(26)（全体）</li> </ul> </td> </tr> <tr> <td>7h</td> <td colspan="2">国立国語研究所からの参観のための発表会(27)</td> </tr> </table>	全	<ul style="list-style-type: none"> <li>・論語についての解説(21)（全体）→感想文作成（個人）(21)</li> <li>・研究授業の準備(22)</li> <li>・論語を読んだ感想の批評(23)</li> </ul>	グ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テスト(24)</li> <li>・新聞企画の話し合い（グループ討論の後全体発表）(25) ※企画のみ</li> </ul>	個	<ul style="list-style-type: none"> <li>・論語についての討論会(26)（全体）</li> </ul>	7h	国立国語研究所からの参観のための発表会(27)	
全	<ul style="list-style-type: none"> <li>・論語についての解説(21)（全体）→感想文作成（個人）(21)</li> <li>・研究授業の準備(22)</li> <li>・論語を読んだ感想の批評(23)</li> </ul>									
グ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テスト(24)</li> <li>・新聞企画の話し合い（グループ討論の後全体発表）(25) ※企画のみ</li> </ul>									
個	<ul style="list-style-type: none"> <li>・論語についての討論会(26)（全体）</li> </ul>									
7h	国立国語研究所からの参観のための発表会(27)									

#### （2）単元「物語の鑑賞」（昭和24年）と単元「古典入門」

大村はまは、「古典入門」の学習活動について次のように記している。

この前に「物語の鑑賞」（全集1所収）の学習で、作品を味わう、作品に描かれている人物・心情・情景を読みとるために、その作品を劇化したことがあった。劇化の過程に、作品は繰返し読ま

れ、人物、心の動き、動作のはしほし、ことばの一つ一つ、全体の雰囲気など、しぜんに細かく深く読むようになり、「この人はそのときどういう気持ちだったでしょう」「このことばにはどんな気持ちがあらわれていますか」などの問いに答えさせることなしに、一人ひとりが自分なりの力をきたえていけるようであった。そして、楽しかった。それで、古典も、そのような方法で読ませたいと、学習活動の向きは早くきまっていた。(注28)

単元「物語の鑑賞」での手ごたえが「古典入門」の学習活動や学習形態を方向づけたといえよう。

古典作品も文学の一領域である。ただ、古典は古語によって書かれている。したがって、作品や作者に子どもがじかにぶつかっていくためには、言語抵抗を取り除いたり、言語抵抗を契機として、作品そのものに子どもを触れさせる手だてが必要だといえる。そこで、大村はまが考え出したのが、萩原広道式の傍注テキストの作成であった。

「物語の鑑賞」と「古典入門」は、展開Ⅰの学習活動において共通している部分が多い。しかし、導入と展開Ⅱにおいては、教材が古典であることへの配慮がなされている。導入での「古典についての文章の掲示」や「傍注テキストの指導者による朗読」によって、学習者を一気に古典世界へ引き込み、展開Ⅰの活動へと導いている。

展開Ⅱでは、「論語についての解説」を行った上で、「批評」や「討論会」が行われている。「古典」学習によって何を学んだのかをメタ認知させる学習活動を単元の終末部に配している。展開Ⅱの学習は、実践がなされた昭和25年の時代背景と大きく関わっていると考えられる。

22年試案によって、戦時中の「古典教育」の偏重は否定された。これを「古典」そのものの否定と考へたり、古典教育アレルギーや古典教育不要へと短絡的に考へる傾向が強かった時代である。これらの風潮に対して安易に同調するのではなく、古典に親しむ経験をさせることによって、「古典」を学ぶ楽しさを実感させ、それを学習者の言葉で表現させようと、大村はま意図した可能性が高い。

### (3) 戦後初期の単元学習指導の特徴(飛田多喜雄氏、昭和26年まで)と「古典入門」

飛田多喜雄は、単元概念規定を「経験を通して統一的な価値ある学習活動をさせること、目的的な価値ある言語経験のいくつかが単元である。」とし、戦後初期(終戦から26年試案まで)の国語科単元学習の特徴9項目を挙げている。試みに、大村はまの単元「古典入門」をその9項目に照らすと次のようになる。

	戦後初期の単元学習指導の特徴 (飛田多喜雄)	単元「古典入門」S25
1	国語プロパーというより、少しでも広い社会的必要ということに結びつけようとしている傾向があったこと。	○
2	大単元主義で、1単元に15時間、20時間という多くの時間を必要とする単元構成であったこと。	◎
3	したがって、1つの単元学習の中で話す・聞く・読む・書くのすべての活動を総合的に織り込み、多目的、多内容の傾向が強かったこと。	○
4	教材に対して資料的な考へが強く、教科書教材にとらわれず、多角的に資料を求めたこと。	◎
5	教材の内容的価値より技能を重くみたこと。	×
6	必ずといってよいほど評価項目を指導法の中に組み入れていたこと。	◎
7	学習活動の中に話しことばが大きくとりあげられ、ディスカッション・メソッドが随時に活用されていること。	◎
8	学習指導案は、単元全体を対象に、たいていの場合①単元設定の理由、②目標、③内容、④資料、⑤計画、⑥学習活動、⑦指導上の留意点等の項目が組み入れられていたこと。	◎
9	各時間の指導過程は、「導入」「展開」「終末」(整理)の段階になっていたこと。	×

戦後初期特有の特徴としては、1, 2, 5が指摘できよう。3, 4, 6, 7, 8は、時期に関係なくその後の単元学習の特徴として挙げられる項目である。「古典入門」は、戦後初期に行われた実践であるが、「古典」の内容的価値を言語技能より軽視したものとはいえない。「話す・聞く・読む・書く」の言語活動は、「古典に親しむ」ために計画され、行われている。よい話し合いをすること、よい劇やシナリオを作ることが目的ではなく、そういう活動をする過程そのものが「古典を親しむ」「古典を楽しむ」時間となっている。

#### (4) 新しい学習指導法としての単元学習法の特徴（平井昌夫氏）昭和28年と「古典入門」

平井昌夫は、昭和28年刊行の「国語の学習指導」において、単元学習法を新しい学習指導法の1つとして認め、その特色8点を挙げている。単元「古典入門」をこれと照合させてみたい。

	単元学習法の特徴（平井昌夫）	単元「古典入門」S25
1	さまざまな学習活動が何かを中核としてたがいに有機的に関係を保ちながら展開されるが、全体として1つのまとまりをなしている学習形態である。	◎
2	児童生徒の自発的で一定の目的をもった学習活動を中心として学習が展開される。	◎
3	児童生徒の生活経験から、またそれを手がかりとしてえられた問題の解決なり、話題の発展なり、作業の遂行なりの過程が学習展開の形態となる。	◎
4	話し合いが有力な学習活動として取り入れられている。	◎
5	個人差に応じた個別指導が取入れられている。	◎
6	学習の展開は普通はいくつかの段階をふんですすめられていくことが多い。	◎
7	評価が学習の初め、途中、終りというようにたえず有機的に取入れられている。	◎
8	教科書に限られず、ひろく視聴覚教具や学級文庫や図書館が大きく活用される。	◎

平井の挙げた特色1は、初期の単元学習の問題点とされた、飛田の3や5を改善したものとなっている。2, 3は単元学習の基本理念であり、飛田には見られなかった観点である。

「古典入門」は、平井の挙げた8点の特色全てを備えており、戦後初期の単元学習でありながら、初期の問題点を大村はまがすでに自覚し、その上で、それらの解決が試みられ改善された単元学習であったといえる。

#### 4. 「古典入門」（昭和25）の成果と課題

単元「古典入門」に学んだ学習者の学習記録には次のような記述が見られる。一部を抜粋する。

##### 学習記録からの抜粋

（下線は発表者が付記した）

<ul style="list-style-type: none"> <li>・古典は常に新しいものであって、古くさいものではない。そして新しい青少年にも表面立ってこそわからないかも知れないが、深い関係のあるものである。</li> <li>・これだけの学習ではじめの目的、目標が達せられたと思う。それにも増してなにより楽しく学習できたことがほんとうによかったと思う。中にはいやなことつらいこともあったが、結局後で考えて思われるのは、いっしょう懸命学んでいろいろ覚えたうれしさである。思いもつかなかった学習方法は、今になっていくら考えてみても楽しいものとなっている。楽しくのびのびとして十分に努力できることがなにより効果の上がる学習であることが考えられる。</li> </ul> <p style="text-align: right;">（S・Hさん、女）</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな時代のあり方、社会状態なども知ることが出来た。</li> <li>・今日までの変化のようすを目の前に見て、今日のあり方を反省しそして遠い将来への見通しもつけられる。</li> <li>・私はこの発表会を終ってから、「古典は今までむずかしくつまらないもので勉強するのはごめんだ」という感じを失い、古典は私たちにいろいろなことを教えてくれたということをはっきり感じました。</li> <li>・そして、又、勉強の方法によってどんなにむずかしいものでもそれを楽しく学ぶことが出来るということを知った。つまらないと思いつながら学ぶよりはこのように楽しみながら知識を増して行くということの</li> </ul>

方がどの位私たちに利益のあるものであるかということはいうまでもない。(M・Kさん, 女)

「古典入門」における、主要な成果としては、次の3点がある。①「古典に親しむ」学習、「古典を楽しむ」学習が成立している。②学習者が古典と自己との繋がりを感じ、古典を学ぶ意義を見出していること。③単元学習による方法の有効性が学習者にも実感されていること。

一方、課題としては、次の2点が考えられる。①グループ活動において、学習者の意欲や取り組みに個人差があったこと。②グループ学習や、個人の口語訳詩制作などの過程で大村はまの強力な指導が必要であったこと。

## おわりに

本稿では、単元「古典入門」と22年試案との関係を探ってきた。22年試案によって、戦時中の「古典や文学」教育の偏重は否定された。しかし、大村はまは、本単元において、導入の重要性、活動することによって学習者自身が古典に親しむこと、そして、その学びや親しむ楽しさを自覚させる学習活動の必要と有効性といった、その後の古典学習指導を貫くものを掴み得たと考えられる。ゆたかな言語生活に培う、新しい古典学習の方法を、大村はまは、単元「古典入門」で見出したといえよう。

22年試案に成文化された新教育の理念や単元学習の理論や方法は、大村はまが受けた大正自由主義教育の精神と親和性のあるものであり、大村はまの学習記録を用いた戦前からの指導は、戦後アメリカから導入された学習者主体の考え方に通底するものであったことが、本稿での考察により明らかになった。

### — 注 —

- 1 第4回大村はま記念国語教育の会研究大会要項「おはま会『卒寿をお祝いする会』でのお話」、大村はま記念国語教育の会、2008、p.22。
- 2 『文部省学習指導要領全21巻 2国語科編(1)』、日本図書センター、1980、p.3。
- 3 飛田多喜雄『国語教育方法論史』、明治図書、1969、p.221。
- 4 輿水實『國語のコース・オブ・スタディ』、非凡閣、1948、p.11。
- 5 飛田多喜雄『続・国語教育方法論史』、明治図書、1988、p.29。
- 6 井上敏夫『教科書を中心に見た国語教育史研究』、溪水社、2009、p.467。(初出「戦後中学校国語科の変遷」『中学校国語科教育講座第6巻中学校国語科の諸問題』、有精堂、1972)
- 7 注2に同じ、pp.147-148。
- 8 大村はま『大村はま自叙伝 学びひたりて』、共文社、2005、pp.121-122。
- 9 注8に同じ、p.190。
- 10 注3に同じ、p.246。
- 13 大村はま『大村はま国語教室<sup>1</sup> 国語単元学習の生成と深化』、筑摩書房、1982. 11 p.46
- 14 注13に同じ、p.60
- 15 注13に同じ、pp.60-61
- 16 注13に同じ、pp.129-130
- 17 注2に同じ、pp.96-97
- 18 注2に同じ、pp.99-100
- 19 注2に同じ、pp.116-117
- 20 注2に同じ、pp.136-138
- 21 注2に同じ、pp.139-140
- 22 野地潤家『国語教育通史』、共文社、1985. 6 p.59
- 23 注4に同じ、p.8
- 24 大村はま『大村はま国語教室<sup>3</sup> 古典に親しませる学習指導』、筑摩書房、1983. 5 p.5
- 25 注24に同じ、pp.27-90
- 26 注22に同じ、p.62

- 27 坂東智子「大村はまによる単元学習指導「古典入門—古典に親しむ」についての考察—学習者は古典世界をどのように内面化したか—」『解釈』（第55巻通巻648集），2009. pp. 27-3
- 28 注24に同じ，pp. 29-30
- 29 注24に同じ，pp. 41-42